

不適切な養育に影響を及ぼす母親の心理的要因の検討

— 認知・防衛・内的作業モデルに着目して —

田 中 奈美子

問題と目的

近年、不適切な養育が社会問題として注目を集めており、心理臨床をはじめ、様々な子どもと関わる現場において、母親の育児が円滑かつ十分になされていない事例が増加している（川瀬，2003）。そのため、わが国では、育児困難を訴える親やハイリスクの親に対する支援が始まっているが、そのプログラムは未整備であり、リスク要因の明確化を含めてアセスメントする力が求められている（東京都多摩保健所，2003）。

不適切な養育に関する親のリスク要因については、欧米にて数多くの理論やモデルが提唱されている。神経心理学の領域では、親の認知・情報処理における歪みや偏りが不適切な養育と関連する可能性が指摘され、虐待の社会情報過程モデルが実証されてきた（Milner, 1993; Nayak & Milner, 1998）。近年は、リスク要因のみでなく、虐待の発生を阻止したり、慢性化を防止する役割を果たす「緩衝要因」を取り入れたモデルが注目されている（Kotch, 1995; Wolfe, 1999）。一方、わが国における従来の研究は、虐待実態調査や虐待事例に基づく臨床家の記述的な研究が主であり、不適切な養育をもたらす親の心理的要因について、具体的に実証された研究はない。発達心理学の領域では、虐待事例に対する母親の共感度や育児不安を扱ったものはあるが、実際の不適切な養育態度を扱ったものは数少ない。また、乳幼児期の母親の経験や心理のプロセスに直接焦点を当てた研究も数少ない現状である。

そこで、本研究では、心理学的な観点から、より具体的に、どのような母親の心理的特性が不適切な養育を喚起しているかを明らかにすることを第一の目的とする。ここでは、欧米での先行研究および臨床実践から導かれた理論をもとに、先行要因として「不安定な内的作業モデル」、前提となる親のパーソナリティ特性として「未熟な防衛」、暴力的な衝動を直接引き起こす引き金要因として「認知バイアス」を取り上げ、不適切な養育の発生メカニズムを検討する。心理的リスク要因の解明は、福祉・保健現場では不適切な養育の予防、医療・臨床現場においては、心理治療への貢献となると考えられる。さらに本研究では、仮説モデルに「緩衝要因」を取り入れ、ハイリスクの親に対する有効な援助を検討し、ケースに介入する際の具体的なヒントを提供することを第二

の目的とする。

方法

(1)一般群：①乳幼児健診に来た母親230名に調査用紙を配布、78名から郵送回収した（回収率34%）。②県内の3つの保育園に在籍する2～6歳の母親420名に調査用紙を配布、366名から回収した（回収率87%）。(2)臨床群：子どものネグレクトあるいは身体的・心理的虐待により、子育て支援外来に通う母親に医師より配布、4名に協力を得た。(3)使用した尺度：母親の認知バイアス尺度（田中，2001）、Defense Style Questionnaire (DSQ)（Bond, 1986）、内的作業モデル尺度（詫摩・戸田，1988）等。

結果と考察

(1) 社会的要因と不適切な養育 社会的要因の中から不適切な養育に対して統計的に見て有意な変数を選択したところ、子どもの数の多さが不適切な養育を促進すること、母親の年齢の高さおよび夫の育児協力の高さが不適切な養育を抑制することが明らかになった。

(2) 心理的要因と不適切な養育 ここでは、Freudに始まる精神分析理論およびBowlbyの愛着理論、虐待の社会情報過程モデルにもとづいてパス解析を行った。その結果、不安定なIWMから不適切な養育態度に至る過程は2通り明らかにされた。1つ目は、IWMのアンビバレント特性が未熟な防衛を促進し、そのストレス対処の未熟さが子どもの行動に対する「否定的な捉え方」を促進し、その結果不適切な養育に至る過程であり、2つ目は、未熟な防衛が不適切な養育に直接影響を及ぼすという過程である。また、暴力系の養育行為においては、否定的認知でなく、被害的認知が影響を及ぼすことが明らかとなった。このことから、臨床事例からの理論が実証され、母親のパーソナリティ、特に生育歴に基づいた未熟な防衛は、母親が自分の子どもの行動や特性を捉える時の1つのフィルターを提供し、被害的認知や否定的認知など特有の認知スタイルを形成し、不適切な養育に至る敷居を低くすると結論づけた。坂井（2002）は、リスクとなる要因の中には、親の暴力行為を直接誘発するような「虐待の引き金」というべきものもあれば、親自身の養育歴のように、長時間かけて潜在的に深く影響を及ぼす因子もあることを指摘している。これに基づく、長期にわたって築かれたアタッチメントの不安定さに起

因する未熟な防衛は、潜在的に不適切な養育に影響を及ぼす要因であり、「子どもにバカにされた」「悪意を感じる」などの認知バイアスは、暴力的行為を直接誘発する引き金要因、「困る」「戸惑う」などの否定的認知は、特に遺棄系行為に結びつく引き金要因と解釈した。また、臨床群から得られたデータと比較検討した結果、一般群から抽出された不適切な養育高得点群（グレーゾーン）には、臨床群と同様のリスク要因として未熟な防衛およびアンビバレント特性が見られたことから、本研究で着目した心理的要因によってグレーゾーン群を弁別しうる可能性が示唆された。

(3) 緩衝要因の機能 緩衝要因として、社会的サポートの役割を検討した。その結果、防衛の未熟さという人格レベルのリスクを持つ親において、「子どもの理解しやすさ」によって、不適切な養育に違いが見られた。このことから、子どもを理解しやすい、育てやすいと思えることが不適切な養育を緩和する可能性が示唆された。また、否定的認知群において、特に「子どもを預けて世話をしてくれる人」の有無によって、不適切な養育に違いが見られ、認知バイアス群において、「悩んだり、相談したいときに頼りにする人」の有無によって、不適切な養育態度に違いが見られた。つまり、認知レベルのリスクを持つ親において、「育児支援の存在」が不適切な養育を抑える重要な役割を果たすことが実証された。この結果は、近年 Wolfe (1999) や Kotch (1995) が提唱している緩衝要因の機能に当てはまると考えられ、モデルの妥当性がおおむね実証された。(Figure 1)

(4) 実践への示唆—予防と治療の2つの側面から—

A) 保健・福祉の現場における援助（予防） 不適切な養育の予防活動においては、まず第一にハイリスクな母親を適切に同定することが重要である。本研究の結果よ

り、母親の行動化や身体化など、葛藤対処の未熟さが、不適切な養育のリスクとなり得ること、子どもの行動に対して被害的に捉えたり、困ったり悩んだりする捉え方の特徴がグレーゾーン群に見出されたことから、乳幼児健診を利用した母親のアセスメントとして「ストレス対処の困難さ」「子どもの行動に対する歪んだ捉え方」への着目が有効であると考えられた。

次に、抽出した母親に対する効果的な援助・介入については、本研究の結果から、子どもの行動に対して歪んだ認知をする母親に対して、不適切な養育状態へと陥らせないための予防策として、認知の修正アプローチを取り入れることの有効性が示唆された。また、防衛の未熟さという人格レベルのリスクを持つ親に対しては、子どもに対する「理解しやすさ」を促進する関わりが有効であると考えられた。具体的な心理的アプローチとしては、子どもに対して、過剰な期待を抱かせることなく、子どもの発達に対する適切な理解を促すこと、子どもへの期待や対応を我が子の発達の実情に合うように修正するような働きかけが不適切な養育の予防に結びつくと考えられる。

B) 医療・臨床の現場における援助（治療） 本研究で明らかになった不安定なIWMに基づく未熟な人格などの深い、潜在的なリスク要因を持つ親や、不適切な養育が慢性化している親に対しては、治療をめざした、あるいは治療につなげる介入が適切になされることが求められ、これらは臨床や医療の現場における心理的援助と考えられた。子どもを虐待する親への効果的な介入については、対処能力、問題解決能力を上げることで、怒りのコントロールやストレスマネジメントにも役立つようなアプローチを実践していくことが、わが国における今後の親治療の課題であると考えられた。

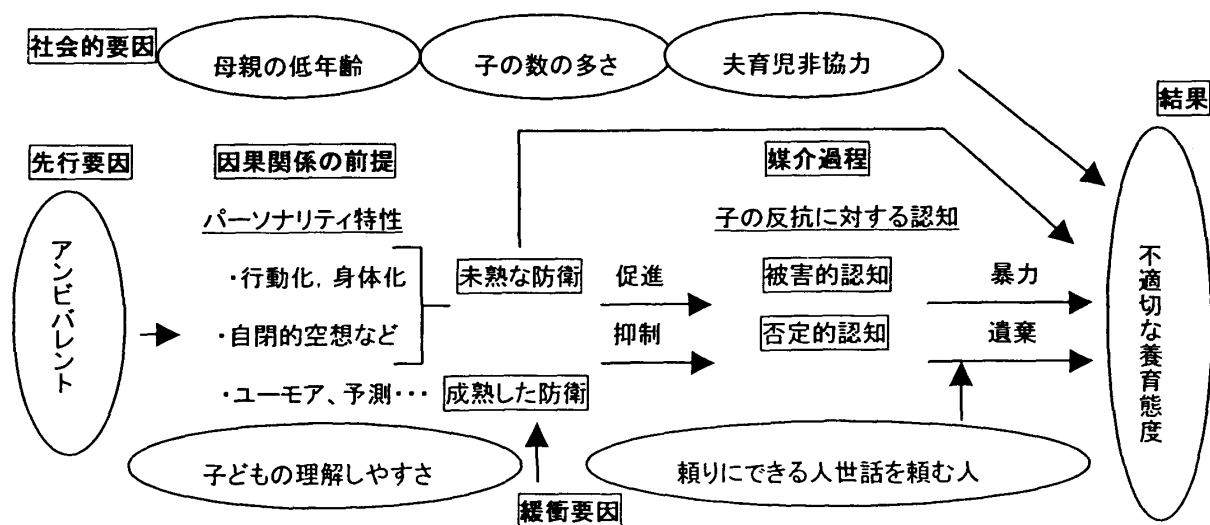


Figure 1 本研究で示唆された不適切な養育発生メカニズムの概要